

# 三蔵法師

平成22年11月第1週放送

本日は、「西遊記」のモデルとして知られる三蔵法師について、史実に基づいてお話致します。

三蔵法師という名前は、実は尊称で、仏教の教えである、経蔵・律蔵・論蔵の「三蔵」を習得した僧侶の事です。ですから、その時代の中国には、何人かの三蔵法師と呼ばれている方々がおられました。

今日のお話の主人公である三蔵法師は、名前を玄奘といい、玄奘三蔵と呼ぶこともあります。

玄奘は、日本が遣隋使を初めて派遣した頃、西暦602年の生まれとされています。小さい頃は、外で遊ぶことを好まず、家で読書をするのが好きな子でした。五歳で母を、十歳で父を相次いで亡くし、先に出家をしていた兄を頼って、洛陽のお寺に身を寄せました。その後、十三歳で正式な僧侶として、仏教を学びはじめました。

ちょうどその時代は、中国が隋から唐へと移り変わる戦乱の真ただ中でした。そんな混乱の中、中国各地を旅しながら、名だたる僧を訪ね歩き、講義を聞く日々を過ごし、二十歳になる頃には、その学識は群を抜き、玄奘の名声は、広く伝えられました。

その後も長安などで仏教の勉強を続けましたが、まだ、中国に伝えられていない多くの経典があるのではないかという思いが生まれ、玄奘はインドに行くことを決心します。国外へ出ることが許されなかった時代、やむなく無断で国を抜け出しシルクロードを西に歩き始めました。玄奘二十八歳の時でした。

初めは案内の者と二人でしたが、やがて一人での旅となり、途中立ち寄った国の国王の多くが仏教信者であったため、庇護を受けながらの旅となりました。とはいえ、今から約千四百年前の事、装備も現代とは比べ物にならない時代に砂漠や氷点下になる山岳地を徒歩や馬での移動です。その上、何度も盗賊に会うなど、過酷極まりない旅を続け、長安を出発して二年後、旅の目的地であるインドに到着しました。

インドではナーランダー大学という、当時最高の仏教の研究施設で数千人いる僧侶の中でも特別な待遇を受けながら、五年間仏教教義を学び、また、インド中のお釈迦さまの聖地を参拝してまわりました。

玄奘が帰国の途についた時には四十歳になっていました。帰路は、立ち寄った国の国王に請われ仏教の講義をしながら三年程かかりました。そして、唐の国の領土に入

る前、出国が無断でしたので、唐の国の皇帝に許しを得るべく手紙を送り、許されての帰国となったのでした。

この旅の記録をまとめたのが、「大<sup>だい</sup>唐<sup>とう</sup>西域<sup>せいいきき</sup>記」という全十二巻の本です。パーミヤンの仏像など今から約千四百年前の姿を記録している、現在でも貴重な考古学的資料<sup>こうこがくてき</sup>となっています。

玄奘が持ち帰った経典や仏像は、馬二十頭が必要なほど膨<sup>ぼう</sup>大<sup>だい</sup>であったといわれています。帰国後は、持ち帰った経典の翻<sup>ほん</sup>訳<sup>やく</sup>を、主に長安<sup>じょうあん</sup>の慈恩寺<sup>じおんじ</sup>などで続け、六十三年の生涯を静かにとじられました。

翻訳された経典の主なものは、現在日本で一番読まれている「般<sup>はん</sup>若<sup>にゃ</sup>心<sup>しん</sup>経<sup>ぎょう</sup>」や多くの寺院<sup>きとう</sup>でご祈祷<sup>きとう</sup>の際に用いられる「大<sup>だい</sup>般<sup>はん</sup>若<sup>にゃ</sup>経<sup>ぎょう</sup>六百巻」などです。

玄奘の一生は、お釈迦さまへの真<sup>しん</sup>摯<sup>し</sup>な思いと、お釈迦さまの教えを翻訳することによって、多くの人々を救いたい。このことを誰よりも強く思い、願ったものだったのです。だからこそ、現在も語り継<sup>めい</sup>がれる名<sup>めい</sup>僧<sup>そう</sup>の一人なのではないでしょうか。